

84 「漢字と中国人」

初めて中国を訪れた。最初に着いたのは広東省 広州である。中国語は全くダメなので、頼りは一冊の「中国語旅行会話」だけだ。多分英語は通じないだろうと思っていたし、実際大きなホテル以外ほとんど英語は通じなかった。まあ、お互い漢字を使うので、最後は筆談で何とかなるだろうという考えもあった。広州国際空港に着き、両替をしてホテルに行くのだが、タクシーでホテルに向かうならホテルの名前だけを告げればいい。しかし、空港から市内までの距離がわからず、いきなりタクシーだといくらかかるか分からない。そこで、バスで市内まで行き、そこからタクシーでホテルに向かおうと決めた。

行先を「広州駅」ということにしてバスに乗った。バスの運転手に“コワンチョウ ステーション”と訊くと、キョトンとした顔で「何??」という感じだった。何度か言ってやっと通じたようで、“グァンゾウ、、、、”と聞こえた。今度はこちらが??となり、「広州」をこちらでは“グァンゾウ”と発音するのか?とやっと合点がいった。「、、、、」はよく聞き取れなかったが、多分中国語で駅という意味の言葉なのだろう。このバスでいいようだ。

これまで、広州は「コワンチョウ」とばかり思っていたので、このことは少しばかりカルチャーショックだった。それは、いつも見ている地図では、中国の地名表記が「コワンチョウ」だったからだ。

地図は少々古いが、1970年第2版「平凡社 世界大百科事典 世界地図」である。また、これも少し古い「旺文社 漢和辞典」の附属地図の地名表記も同じだった。

このことは頭の片隅に引っかかってはいたが、ずっとそのままになっていた。

ところが、つい先日CSテレビ(ナショナル ジオグラフィック チャンネル)で、サム・ウイリスという海洋史家がレポーターとなって中国を紹介する番組「中国と海洋文化」を見た。交易によって、多様な文化が繋がるというもので大変興味深い内容だった。この番組の中で、彼が「広州」を“グァンジョウ”といていたのを聴いて、俄然調べようという気になった。

家にあった2001年改訂新版第8刷「学習研究社 新版 漢字源」で調べると、「広」の発音は“Guǎng”となっていて、確かに“グァン”という発音。また、「州」の発音は“zhōu”であり“ゾウ”という発音である。従って「広州」は“グァンゾウ”となるわけだ。正確には“グァンゾウ”と“グァンジョウ”の間くらい音かもしれない。辞書には「広」“Guǎng”は「呉」「漢」の発音、「州」“zhōu”は「呉」の発音とある。とすると、地図の“コワンチョウ”とはどこの発音なのだろう?

日本語の漢字には音読みと訓読みがあり、訓読みはその漢字の持つ意味に即した日本独自の読み方である。音読みは中国の発音をもとにした読み方であるが、調べたところさらにいくつか種類があることが分かった。それは、日本が取り入れた漢字の発音が、時代や地域によって異なっていたためだ。

諸説あるようだが、簡単にいえば「呉音」「漢音」「唐音」である。最初に入って来た「呉音」は、中国南部 南京あたり(当時「呉」の国)の発音で、四書五経や仏教経典などとともに伝わってきた。そんなことから仏教用語は呉音のものが多そう。次に「漢音」は、奈良から平安時代に遣隋使や遣唐使を通じて入って来たもの。唐の都 長安あたりの発音で、現在の中国語の発音のもとになっている。それと鎌倉時代以降に禅宗を通じて取り入れられた「唐音」がある。

辞書に「呉」「漢」とあったのは、発音がどこから伝わったものかを示したものだ。なるほど、漢字の読み方にも由来があったわけだ。

調べてもなかなか分からなかったが、ネット上でヒントらしきものが見つかった。地名の読み方は、

50年以上前に、有識者が普通話（公用語）や北京語をベースに作ったのが始まりとのこと。

中国語の発音は、「拼音」と「四声」で表される。ピンインは発音をローマ字で表記したものである。発音には〔高低〕の要素と〔上がり下がりアクセント〕の要素があり声調という。

声調は全部で4種類あるので「四声」と呼ばれ、声調符号はピンインの頭につけられる。中国語は、この高低変化のパターンの違いを語彙の意味分けに用いている。従って、中国語の発音は四声（アクセント）が正しくないと、違う意味になってしまい全く通じない。

四声は[a : ア]でいうと概略次のような感じだ。

[ā] : 高くて平ら（船の汽笛が「ポー」となる感じで、音が最後まで一定）

[á] : 上がり調子（「え～え！」と驚くときのように）

[ǎ] : 低くおさえる（「あ～あ」とため息をつくような感じ）

[à] : 下がり調子（カラスの「カー」という鳴き声のように）

これを Guǎngzhōu に当てはめて発音すればよいが、正確な発音は到底カタカナでは表現できない。

「Guǎng」 「グァン」でなく「グァン」と弱く、「zhōu」は「ゾウ」と高く一本調子で、「ゾウ」と「ジョウ」の間くらいで「グァンゾ（ジョウ）ウ」という感じだろうか。正しく発音すれば、これが「コワンチョウ」という発音にかなり近づいてくるということなのかも知れない。

要するに、中国地名の発音は複雑すぎてカタカナでは表現できなということだ。

多分、この「コワンチョウ」を日本人が日本流の発音で話すと、中国人には全く通じないということが真相だと思われる。これは、カタカナ表記とか発音能力の問題ではなく、言葉の根本的な違いによるものだろうと考えられる。同じ漢字という文字を使う言葉でありながら、両者の違いはとても大きい。

実際「旅行会話」の中国文を話しても、現地の人にはほとんどと言っていいほど通じなかった。

「77 漢字と日本人」で書いたように、漢字は原則すべての単語が一音節で、1つの文字で書かれる。そして4つの声調を持つことで、漢字の読みが他の漢字と同じ発音となることが少なく『聴いて分かる言葉』である。一方、日本語は1つの発音に対しいくつもの漢字が該当し、聴いただけでは意味が特定できない『見ないと分からない言葉』となっている。これは、日本語と中国語の大きな違いであり、言語の優劣とは別に、それぞれの言葉の持つ特徴といえる。

ワタクシリツ／私立とイチリツ／市立、カガク／科学とバケガク／化学というように、言い方を工夫して話さなければ通じないのが日本語の特徴だ。



「平凡社 世界大百科事典 世界地図」



「旺文社 漢和辞典の附属地図」

エピソード I

広州の空港で両替した紙幣「元」の中に、ニセ札が何枚か混じっていた。

その後、空港から乗ったバスは50分ほどで市内に入った。しばらくしてバスを降り、すぐにタクシーを止める。乗るとすぐ値段交渉、値段が折り合わないとは車は走り出さない。

タクシーは交通渋滞の中、せめぎ合いながら進む。運転手は走りながらも、早く金を渡せと急ぎ立てる。ストレスの車間距離で走っていて危険極まりないのだが、こういう運転に慣れているのだろう。

100元札を渡すと、札の状態をよく検分し端に1ミリくらいの切れ目があるからダメだと返してよこした。別の新しい札を渡すと、またよく検分してこれもダメだと返してくる。もっとあるだろう、別のを出せ。また新しい札を出し、やっとOKになった。

ところが、こちらが出した札は新品に近い札だったのに、返って来た札はボロボロで、今度はこちらがこんな札はダメだと突っ返した。それでもかなりくたびれた札を渡してきたのである。

そんなことをしたのは、目の前でわざわざ汚い札を選んでよこすという、我々の感覚からしたら信じられないやりようだったためだ。こんな経験をして、中国の第一印象はあまり良くなかった。

ホテルにチェックインして荷物を置き、街に出て博物館などを見た。ホテルへの帰り道、散歩しながらスーパーで買い物して出した50元札を突き返された。どこが悪いのかわからないが、とにかく受け取らない。後で分かったのだが、どうもこの札がニセ札だったようだ。

その後、四川料理店に入り食事して、そのとき出した100元札をまた突き返された。この時も何故返されたか分からなかったが、これも多分ニセ札だったのだと思う。とても腹が立ち気分が悪い。

翌日、ホテルの隣にある海鮮料理店で食事した。料金を支払う段になって、このとき出した100元札がニセ札だと初めて分かった。店のレジにはニセ札の判別機があり、すぐに判るようになっていた。

それと、ニセ札の番号は判明していて、公安当局から番号が発表されているとのことで、番号の一覧を見せてくれた。店の人との会話は、ほとんど身振り手振りである。店員はとても親切で、日本人の私に、国の恥とも思わず自国の実態を明かしてくれた。店員も気の毒がってはいたが、彼らとしてもどうすることもできない。

ニセ札と分かれば受け取るはずはない。これで昨日からのナゾは判明したわけだが、何より腹が立ったのは空港の両替だ。何も分からない旅行者に、ニセ札を渡してよこすなど言語道断！

これではダメだ。両替した中にニセ札が何枚入っているか分からないが、今後使うのは望み薄だろう。空港で両替したのは日本円で5万円、それが3,400元だから100元札で34枚。

100元札は最高額紙幣で、日本円で約1,500円になるのだが、このうち何枚がニセ札なのだろう？ 空港で受け取ったのは全て100元札だから、昨日スーパーで出した50元札は、市中で釣としてもらったもので、何も知らない旅行者は、常にニセ札を掴まされる危険性があることになる。

旅行中にニセ札をもらっても、知らずに使っていることも考えられる。受け取る相手も、常にニセ札をチェックしているわけではなさそうなので、実際どのくらいニセ札を持っていたのかは分からない。

結局、帰国までに使えずに残った札は100元札3枚と、50元札2枚だった。これらは明らかにニセ札であり、損害としてはほぼ6,000円ということになった。



「ニセ100元札（人民幣）」

エピソードⅡ

広州では、広州博物館、広東省博物館、西漢南越王博物館などに行った。そこでもらった案内パンフレットは、中国語、英語、日本語で書かれていた。昆明では雲南民族博物館に行き、その案内パンフレットは、中国語、英語で日本語の説明はなかった。パンフレットの中の日本語は、多分中国人が作ったもので、日本人と同等程度の日本語が解る人がチェックしていないと思われるものがあった。パンフレットの説明文としては「ですます調」が適切だろうと思うが、「である調」だったり、中には明らかに間違いというものもあった。以下は、広東省博物館のパンフである。例えば、

「魯迅の一生と記念展」は我が国の有名な作者魯迅の一生と後世の人々が先生にの懐かしみを表している。

この説明文には明らかに誤りがあるし、使われている単語も適切ではない。これを日本人として添削するとすれば次のようにするだろう。

「魯迅の生涯と記念展」は我が国の著名な作家魯迅の生涯と偉大な先人を継ぐ人々の追想を展示しています。



《魯迅生平与纪念陈列》展示了我国著名的文学家魯迅先生的生平及后人对他的怀念。

Exhibition of Life and Memory of Lu Xun
It shows the life story of Chinese great writer Lu Xun and the memory of later generations.

「魯迅の一生と記念展」は我が国の有名な作者魯迅の一生と後世の人々が先生にの懐かしみを表している。

《国民党“一大”与第一次国共合作史料陈列》国民党“一大”旧址在广州市文明路215号钟楼堂，面积三百多平方米，现已恢复了大会时的原状。《国民党“一大”与第一次国共合作史料陈列》讲述了“国共合作”的酝酿、实现和破裂的历史过程。

Display of the First Congress of KMT and the First Cooperation between KMT and CPC. The site of the First National Congress of KMT is located at No.215, Wenminglu, and Guangzhou with an area of 300 m². Display of the First Congress of KMT and the First Cooperation between KMT and CPC illustrates the historical course of the preparation, realization and breaking down of the Cooperation between KMT and CPC.

「中国国民党第一回會議の旧跡」は広州市文明路215号、即ち鐘樓堂に位置しており、300ぐらい平方メートルになり、今はもう會議を開催した時の様子を取り戻した。「第一回中国共産党と中国国民党の協同に關しての史料展」は兩黨協同の準備から達成、破裂までの歴史過程を表している。



「広東省博物館パンフ」

(2020. 04. 22)